

ひょうご 水百景

No.43 新井用水（加古川市八幡町～播磨町古宮）

～今里伝兵衛が一命を賭して築造を指揮した「水の道」～

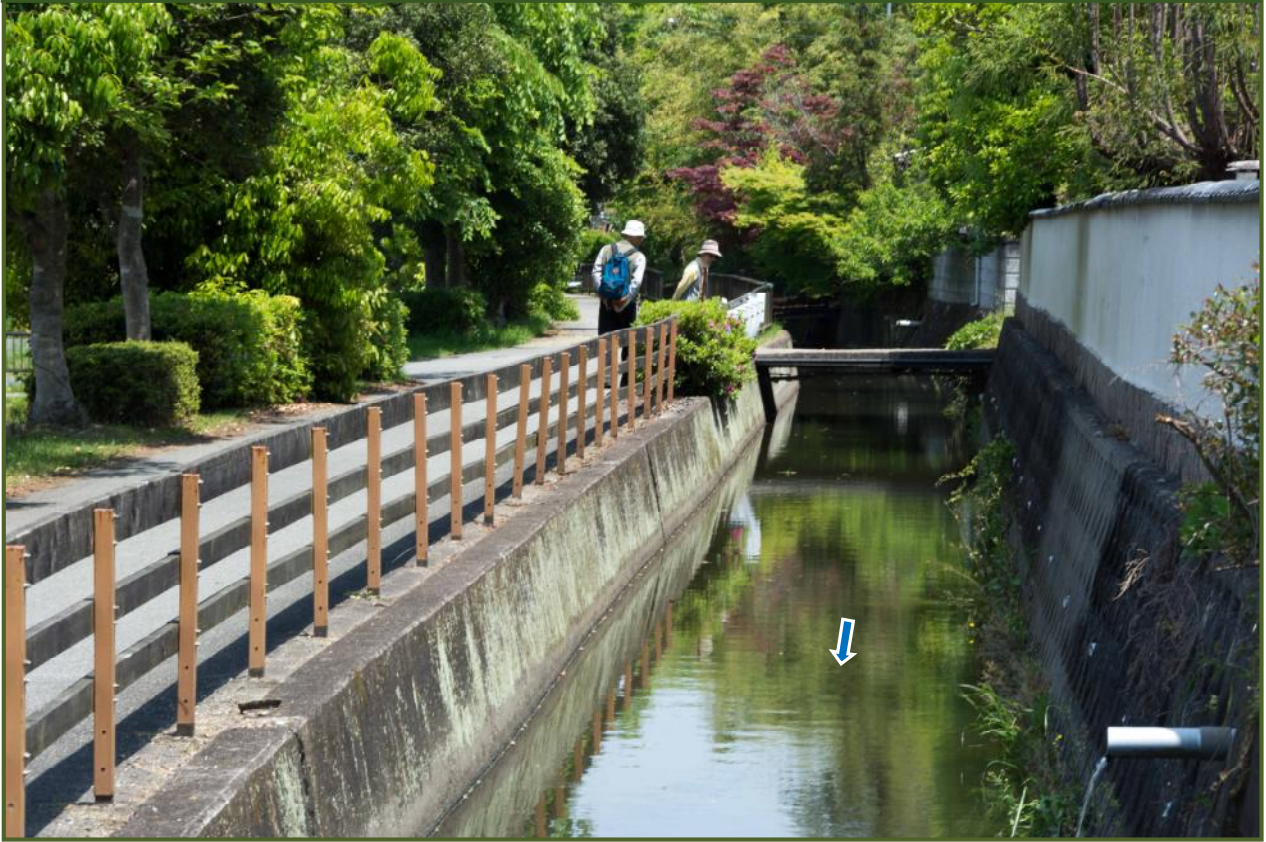


写真-1 新井緑道沿いを流れる新井用水（平成26年5月撮影）

■ 新井用水に沿って続く“新井緑道”

上の写真-1は、加古川市が昭和59（1984）年度から3年がかりで整備した延長約2kmの「新井（しんゆ）緑道」です。新井（しんゆ）用水に沿った散策路（加古川市加古川町大野～同市野口町水足）で、並行して走る道路もないことから都市部の喧騒を忘れて、緑陰を新井用水の流れのようにゆったりと散歩することができます。

この新井用水（既設の五ヶ井用水に対して新しい溝（川）という意味で新井用水と呼ばれている）は、加古川市八幡町中西条の加古川大堰から同市野口・平岡・別府各町を経て、播磨町の古宮（こみや）大池に至る全長3里半（≒13.7km）の農業用水路で、古宮組（現・播磨町）大庄屋・今里伝兵衛（でんべえ）重幸が中心となって計画され、明暦2（1656）年延べ16万4千人を動員して開通しました。



写真-2 JR山陽本線の南を流れる新井用水



写真-3 峠池の南を流れる新井用水



写真-4 平岡町山之上を流れる新井用水

加古川の取水口と最下流の古宮大池の高低差が約7m、平均勾配が1/2,000というほぼ平坦地を曲がりなどを巧みに利用して水を通すとともに、下流にまで水が届くように、水路の幅も分水口から旧山陽道の近代橋までが2間

(3.6m)、新代橋から二俣宮の下までが 1 間半 (2.7m)、二俣宮の下から古宮大池までが 1 間 (1.8m) と工夫しています。

また、途中河川を渡る所には「刎場」(はねば: または刎所≒放流口) や「埋樋」(うずみび=逆サイフォン) を設けるなど、当時としては高度な土木技術が使われています。

開通当時、素掘りだった用水路はコンクリート製に変わるなど、開通後 350 年以上の長きにわたり何度も改修を重ねながら、今も地域の重要な農業用水として豊かな水のめぐみを与えています。

■ 新井用水建設のきっかけとなった承応 3 年の大旱魃

江戸時代前期の承応 (じょうおう) 3 (1654) 年は春から真夏にかけてほとんど雨が降らず、加古川から遠く離れた位置にあって溜池に頼らざるを得ない古宮組などは、姫路藩から年貢が免除されるくらいひどい旱魃^{※1} でした。少ない水で田植えはしたものの、あとの水が続かず、田は次第に乾いて稲はしおれてきました。寺田池の水も完全に干上がってしまい、必死で池の底を掘ったり井戸を掘ったりしましたが、この年はわずかにくず米しかできず、来年の種籾すらありませんでした。

それに比べて加古川から取水している五ヶ井郷はほとんど被害がなく、水田は夏の太陽をいっぱい受け、むしろよく実っていました。古宮組をはじめとする村々の百姓は食べるものがなく、五ヶ井郷から食料と種籾を分けてもらって、やっと生活をつなぐありさまでした。

※1 旱魃 (かんばつ) : 雨が降らないなどの原因で起こる長期間の水不足の状態で、旱は「ひでり」、魃は「ひでりの神」の意味である。いずれも常用漢字ではないため「干ばつ」と代用表記する場合がある。

■ 今里傳兵衛、一命を賭して安定水源の確保をめざす～五ヶ井から分水

大旱魃の惨状を目の当たりにした古宮組大庄屋・今里傳兵衛は、旱魃に苦しめられる村々の農民を救うため、五ヶ井の取水口から分水して用水路を開削する計画を立てました。

傳兵衛の呼びかけに応じたのは、古宮組 18ヶ村、高砂組のうち別府村、寺家組のうち 4ヶ村、計 23ヶ村で、いずれも当時の行政区分である「加古郡」に属し、姫路藩の支配下にあった地域です。現在の加古川市野口町 (7ヶ村)、平岡町 (5ヶ村)、別府町 (2ヶ村)、播磨町 (9ヶ村) に当たり、これらが後に成立する「新井郷」です (寛文 10 年古宮組の本庄村が東西に分かれて 24ヶ村になる)。

傳兵衛は関係する村々の庄屋の同意を得て、一命を賭して時の姫路藩主・榊原忠次に用水路開削の許可を求めました。ちょうどその頃、姫路藩では度重なる水害が財政を圧迫、そのため旱魃や水害対策、新田開発によって事態を打開しようとの施策転換がありました。

忠次は用水路開削を「一郡永久の計」であるとして、五ヶ井郷に対して分水を命じ、領内の百姓にも動員をかけて、明暦元 (1655) 年 1 月藩の事業として工事を開始します。傳兵衛も「万一新溝成就いたさず候はば、家族もろとも極重の罪科を蒙り候とも、少しも怨悔これなし」との決死の覚悟で工事を指揮、翌明暦 2 (1656) 年 3 月竣工します。

開通式の日、傳兵衛は白装束で臨んだといひます。今里家の家譜によると先祖は清和源氏の出といわれ、別所氏の家臣から豊臣氏の家臣となり、後野に下って、父重執の時より大庄屋になっており、元々は武士だったようです。

この大事業に精根を使い果たしたのか、傳兵衛は念願の新井完成から 3 年後の万治 2 (1659) 年に 50 歳で亡くなっています。

■ 新井用水を辿る～高度な技術で難所を克服

① 五ヶ井用水から分水

五ヶ井樋門から流れ出た用水は、32 間 (≒58m) 下に設けた分石所で五ヶ井用水から分水されます。

分水量は 1/6 で、毎年五ヶ井堰築造等に係る費用や夫役も 1/6 を負担することが分水の条件となっています。また、分水地点から下流 80 間 (≒145m) は、分水量に影響を及ぼさないよう「柿ノ木浚 (さ) え」といって新井郷が勝手に浚えてはならず、加えて当然のことではありますが、旱魃の時は「古井優先」の水利慣行から、新井への分水口を閉めて五ヶ井用水へ優先して流すことになっています。



図-1 新井用水ルート図 (「いなみ野ため池ミュージアム」から引用・加工)

② 曇川を越える

新井用水は、五ヶ井樋門から古宮大池までの間に3本の川（曇川、白ヶ池川、喜瀬川）を越えます。

最初に越す曇川は、新井用水と合流し、平常時はそのまま下流へ流れていきますが、洪水時や水が不要の時は、刎場の戸を開けて五ヶ井用水を經由して加古川に放流していたそうです。刎場の水通り幅は、寛延3（1750）年の『古宮村明細帳』によると3間（≒5.5m）でしたが、文久3（1863）年には幅4間（≒7.3m）と大きくなっています。ただ、元々五ヶ井用水は曇川と合流していて、曇川の余水も受けていた（現在も同様）のに、なぜ水利秩序が新井用水築造により一時的に変化したのかよくわかりません。



写真-5 新井用水

明治40（1907）年頃に曇川を斜めに潜る逆サイフォン構造になり（水利秩序が戻っている）、さらに昭和の改修で現在のヒューム管製（L=56m,Φ=1m）に改良されています。

（ただ、曇川サイフォン横に立つ「水の恵み」説明板には、築造当初は「木製の笥で川の上を横断していた」と記されています。）

③ 日岡山麓における岩掘削

日岡山と五ヶ井用水に挟まれた狭い所に水路を通すためには、山裾の岩盤を掘削しなければなりません。大勢で金でこ・ノミ・鎚を使って叩き壊し、石が水面に出れば小さいものは引き起こし、大きなものは烈火で焼き脆くした上で砕いたとか（今は、日岡山と五ヶ井用水との間にJR加古川線と道路がありますが……）。

④ 白ヶ池川を越える

場所は、加古川バイパスの北、ハリマ化成（株）加古川製造所の西南隅付近で、昭和60（1985）年に完成した施設は、ゲートの開閉により流路の切り替えが可能で、通常新井用水はサイフォンで白ヶ池川の下を潜っています。

この施設ができるまでは、曇川と同様に新井用水の排水だけを刎場で白ヶ池川に流していたそうです。明治17（1884）年、洪水の度に修復していた白ヶ池川の刎場を土堰から石の水門に改築、さらに昭和29（1954）年にはコンクリート樋門に改築されています。水通り幅は2間半（≒4.5m）でした。



写真-6 白ヶ池川



写真-7 サイフォン香口

余談ですが、新井用水が白ヶ池川に合流する手前に「くんれん橋」という名の橋があり、この橋の約400m上流には「聯隊（れんたい）橋」（昭和13年6月竣工）という名の橋があります。戦前、聯隊橋から南へ約100mの所に旧陸軍高射砲第三聯隊があったことからこの名が付けられたそうです。

また、下流約500mには旧山陽道の「新代橋」があります。『新井土地改良区解散誌』には、旧山陽道の橋を「往還橋」と記載していますが、そのような橋は付近を探しても見つかりません。おそらく、「往還橋」は大正4（1915）年12月に架けられた新代橋の旧橋名と思われる。



写真-8 旧山陽道の新代橋



写真-9 新井用水に架かるくんれん橋



写真-10 聯隊橋 (昭和13年6月竣工)

⑤ 新井用水から最初に取水する池～峠池

峠池の湖畔に立てられた説明板には、名前の由来について以下のように書かれています。

「この池の辺りは小高い丘陵地になっています。昔、ため池西部の細田村（良野）集落から南東部の農地まで農耕具を荷車に載せてこの丘陵地を行き来しました。この池沿いの峠道には、洪水吐からの水路が併設されていたため、大雨になると洪水吐から水路を通して溢れ出た水が、峠道を川のようにしていました。現在は道路も舗装され、水路の位置も変わったことからその面影はありません。

このように峠にあった池であることから「峠池」と呼ばれるようになったとされています。峠池は、今里傳兵衛が開削した新井水路から最初に取水する池です。構造は、谷部を堰き止めて構築する谷池です。付近の溜池とは異なり、市街地では珍しい構造です。」



写真-11 峠池への取水樋門



写真-12 峠池

⑥ 喜瀬川を越える～大中埋樋（おおなかうすみひ）

新井用水が喜瀬川を渡る所では、「埋樋」を用いています。寛延3（1750）年『古宮村明細帳』等によると、埋樋の諸元は、長さ21間（38.2m）、内法は幅2尺6寸、高さ1尺7寸（79×52cm）、普通松板で厚さは3寸（9cm）です。木は腐食するため10年も経つとあちこちが落ち込み難渋していたようで、藩に石造に改築する補助願いを出すもなかなか認められず、天保初年の頃、ようやく石造になっています。

明治32（1899）年の『新井堤防取調帳』には、この石造の埋樋の寸法が、長さ27間（49m）、幅2尺7寸、高さ1尺9寸（82×58cm）とあり、当初の木製に比べ大きくなっています。これが鉄筋コンクリート製になるのは、昭和32（1957）、33（1958）年の頃です。そして、平成10（1998）年には、喜瀬川広域河川改修事業の中で、河床掘削に伴う付帯工事で、埋樋の改築を行っています。



写真-13 喜瀬川サイフォン



写真-14 喜瀬川を埋樋で越える

⑦ 用水路の終着点～古宮大池

播磨町役場の南南東約 450m の所にある古宮大池は新井用水の終着点です。平成 26 (2014) 年、これまで各所に点在していた今里傳兵衛ら新井功労者の頌徳碑が、この池の南隅に造成された公園にまとめられています。(写真-15)



写真-15 古宮大池の公園に集められた頌徳碑等

■ モノローグ

新井用水の開削により 600 町歩の田畑が甦り、新井郷 24 ヶ村の農業経営は格段に安定しました。水路開削に命を懸けた今里傳兵衛重幸に対する新井郷の人々の感謝の念は、古宮大池に立つ頌徳碑にも顕れています。

また、新井用水沿いに立てられている「水のめぐみ」の説明板からは、新井用水築造の歴史を学ぶことができます。

何気なく水路を見ていると、当たり前のように水が流れていますが、この水を確保するために多くの人々が命を懸けて取り組んだ歴史があり、そのおかげで今、私たちは水の恵みを享受しているわけです。水の大切さを忘れず、先人の功績を称え、後世に継承していくことが大切です。



写真-16 古宮大池に遊ぶカルガモの親子

【参考資料】

- 1 『新井土地改良区解散誌～今里傳兵衛と新井の歴史』新井水利組合連合会 平成 10 年 10 月 1 日
- 2 『兵庫の土地改良史』兵庫県農林水産部農地整備課編 平成 2 年 3 月
- 3 『加古川市史 第二巻～本編Ⅱ～』加古川市史編さん専門委員編 平成 6 年 3 月
- 4 『播磨町の民話と郷土史』播磨町立図書館 平成 7 年 1 月
- 5 『いなみ野ため池ミュージアム』いなみ野ため池ミュージアム運営協議会

※発行：平成 26 (2014) 年 12 月 『ひょうご水百景』No.43

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』No.43